



群馬大学文部科学省科学技術人材育成費補助事業 ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ (特色型) 中間総括シンポジウム開催

令和元年11月29日、群馬大学文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ (特色型)」の中間総括シンポジウムが荒牧キャンパスミュージアムホールで開催されました。シンポジウムに先立ちポスターセッションでは研究者29名のポスター発表と異分野の研究を通じた活発な議論が行われました。平塚浩士学長の開会挨拶の後、工藤貴子男女共同参画推進室長から「群馬大学ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ事業」の説明がありました。基調講演「男女共同参画社会基本法を職場で活かす」では、村越芳美弁護士から、難しいイメージがある法律関連の話題を、“なぜ最高裁の裁判官には女性が少ないのか”、“なぜ小学校には女性の先生が多いのか”、など身近な題材を用いてご説明いただきました。

パネルディスカッション「ワーク・ライフ・バランスから始まるダイバーシティ」では、4名の先生をパネリストにお迎えしました。(株) 沖電気工業川井茂子氏は、時世の変化にあわせた就業とキャリアアップについて、女性就業者の指導で留意する3つの「き」、“(き)めつけない”、“期(き)待する”、“鍛(きた)える”、を含めてお話しくださいました。ご夫婦ともに研究者として活動する高崎経済大学安田慎氏からは、研究継続と家庭生活とのバランスについて、完璧を求めない、休む時には休む、コンスタントに研究発表を行うなど、具体的な取り組みを伺いました。10周年を迎えた群馬県ぐんま男女共同参画センター「とらいあんぐる」藤田早苗氏は、セミナー・講習会開催、男性参画プロジェクト、人材育成など、センターの活動をご説明くださいました。総合討論では、村越弁護士とともに参加した多種多様な研究者からも活発な意見交換がなされ、研究者のキャリアアップを題材に、ワーク・ライフ・バランス、情報共有、コミュニケーション、時間的余裕が鍵となり成果につながるのではないかと議論で盛会のうちに閉会となりました。



ぐんまダイバーシティ推進地域ネットワーク会議開催

令和元年10月30日、第6回ぐんまダイバーシティ推進地域ネットワーク会議が高崎経済大学において開催され、各会員機関代表者6名、学内4名、オブザーバー4名（育英大学、桐生大学、群馬県2名）が出席しました。まず、自己紹介から始まり、各機関の情報共有事項の説明、シーズ集の現状、「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）事業 総括シンポジウム」の案内がありました。

また、10月30日付で桐生大学及び育英大学をネットワーク会員とすることが了承されました。これで、県内すべての大学がネットワーク会員となりました。次年度以降の会長、事務局及び開催校（会場校）の持ち回りについては後日メール審議とし、来年度の開催校は群馬県立女子大学となることが承認されました。群馬県との意見交換では、群馬県の事業概要の説明や、大学生と一緒に進めていきたい事業計画があるので、各会員機関に協力の要請がありました。会議後の報告会では、群馬大学から「性の多様性ガイドラインの作り方～自由なキャンパスの実現を目指して～」、高崎経済大学から「イクメンが直面する家事育児の壁」の報告がありました。



理工学部大学院進学を促す講演会開催

令和元年11月6日（水）、理工学部において主に学部3年生を対象に大学院進学を促す講演会を開催いたしました。社会人OG、教員、両立支援アドバイザー、現役大学院生の女性4名によりそれぞれの立場から、大学院に進学した動機やメリット・デメリット、研究内容、就職、仕事内容、未来に羽ばたくためのアドバイス、などについての講演が行われました。参加人数は、学生77名(男子42名、女子35名)、教職員9名(男性5名、女性4名)と昨年を上回りました。

講演会終了後のアンケートでは、「今まで就職しか考えてなかったが今日の話聞いて大学院進学も視野に入れてみようと思った」「大学院に行く理由は人それぞれ全く異なっていて自分なりの理由で行くのもありだと思った、大変ためになった」「院生になるための疑問や不安を少し無くすることができてよかった」「色々な立場の人からの話が聞けてためになった」などの感想が寄せられました。学生達にとっては大学院進学を検討する他にも、就職や未来の自分を考える良い機会になった様に見受けられました。



医学系研究科男女共同参画推進委員会 FD セミナー開催

令和元年11月28日に昭和キャンパス臨床大講堂にて医学系研究科男女共同参画推進委員会主催のFDセミナーが開催されました。本委員会は群馬大学が文部科学省科学技術人材育成費補助事業『ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）』に採択されたことを受け、重点学部として昨年3月に発足しました。今回はその活動の一環として、女性のキャリアアップやワーク・ライフ・バランスについての意識向上を目的としたセミナーを実施しました。講師として、東北大学男女共同参画推進センター長・同医学系研究科発生発達神経科学分野 教授 大隅典子先生をお招きし、『女性が普通に働ける社会へ:思想と支援は車の両輪』と題し、お話をいただきました。セミナーでは、男女共同参画に関する諸外国と日本との比較データをはじめ、様々なデータが取り上げられ、大変説得力がありました。また、日本に根付く「刷り込み」や「無意識のバイアス」などに頷く参加者も多く、終始見応えのある内容でした。なお、当日は、午前中の開催にもかかわらず約40名の参加者を集め、セミナー後の質疑応答では活発な意見交換が行われ、盛会のうちに終了しました。



令和元年度 医学生・研修医等をサポートするための会開催

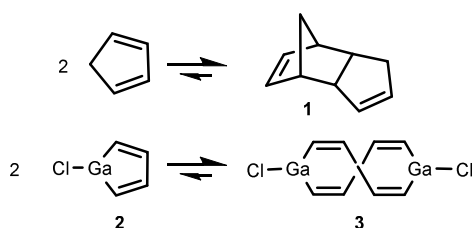
令和元年12月4日、群馬大学医学部附属病院刀城会館にて医学部医学科4年生112名の学生を対象に、「医学生・研修医等をサポートするための会」が開催されました。講師として群馬大学医学部卒業生の日本医科大学学生化学・分子生物学 大石由美子教授にお越しいただき、4年生の在籍数にちなんで「112通りのしあわせキャリア」と題して、医師としてのキャリア形成やワーク・ライフ・バランスについてご講演いただきました。循環器内科医として群馬県内で研修を開始し、上司の勧めで大学院に進学後、一貫して生活習慣病に関する基礎研究に従事されている大石先生は、ご自身の研究活動、米国での子育て、現在のご所属での教育や指導などについて、幅広くご講演くださいました。多くの研究成果を発表し、日本医科大学の創設以来、医学部では初の女性主任教授となった大石先生の「ダイバーシティ（多様性）&インクルージョン（包摂）」とは、女性研究者だけでなく誰もが情熱と誇りをもって研究を続けられる体制の整備、とお話いただき、ご講演後の情報交換会も話題が尽きることなく、多くの学生とご歓談くださいました。



ガラシクロペンタジエンの環拡大反応 —実験的および理論的検討—

理工学府分子科学部門 准教授 村岡 貴子

シクロペンタジエン C_5H_6 は、有機合成に利用される一般的な環状ジエンの1つである。シクロペンタジエンは、2分子間で $[4\pi + 2\pi]$ 型の環化付加反応を起こし、常温常圧下では二量体**1**として存在する。シクロペンタジエンの CH_2 フラグメントを13族元素であるガリウムフラグメント RGa ($R = Cl, \text{アルキル, アリール}$)で置換したガラシクロペンタジエン $RGaC_4H_4$ は、電子豊富なジエン骨格と電子不足な13族元素を分子内に有し、分極したGa-C結合を含んでおり、その電子的特性や反応性に興味を持たれている。我々は、2分子の**2**がGa-C結合の切断を伴う二量化により環拡大を起こし、2つのガリウムを含む10員環テトラエン誘導体**3**へ変換されることを見出した。**3**の生成機構を理論的に検討したところ、**2**のジエン部位 (HOMO) とC-Cおよび2つのGa-C結合の結合性 π 軌道 (LUMO) が相互作用することで、エネルギー障壁無しで**3**が生成することが分



かった。LUMOはGaの空のp軌道の割合が大きいこと、また10員環テトラエン生成はガリウムと同族のホウ素ではエネルギー障壁があることから、同族異周期元素間で反応性が異なり、10員環テトラエン生成はガリウムに特徴的な反応であることが示唆された。今後、**2**および**3**の性質についてさらに明らかにしていく予定である。

アスペルギルス由来化合物テレインの 気管支喘息にもたらす効果について

医学部附属病院 地域医療研究・教育センター 医員 齋藤 悠

気管支喘息は気道炎症として位置づけられているが、既存の治療ではコントロール困難な難治性喘息が含まれており、新たな治療アプローチが重要であると考えられている。抗炎症性作用をもつテレインはアスペルギルス由来の合成物質であり、これまでに口腔炎症において血管新生を抑制し、炎症抑制効果を発揮することがわかっている。本研究ではテレインの気管支喘息における効果を解析し、新規抗炎症薬として創薬に結びつけることを目的とする。まず、喘息の主なアレルゲン物質であるハウスダストマイト懸濁液をマウスに点鼻し (day0-2, day14-17) 気管支喘息モデルを誘導する。day14-18にテレインを腹腔内投与し、最終点鼻48時間後であるday19に肺胞洗浄、心臓採血、肺組織採取を行った。コントロール群はPBSを用いた。肺胞洗浄液中の総細胞数は喘息モデル群に比べて、テレイン投与群はその有意な抑制を認めた。今後は肺胞洗浄液中のサイトカイン測定、肺組織の評価を行い、テレインが喘息モデルに抗炎症性作用をもたらすか更に解析を進めていく。平成31年2月6日には共同研究者企画の次世代研究育成グループミーティングの外部講者として、今回のテーマに基づく研究成果を発表した。今後の研究成果についても随時発表していきたい。

平成30年度共同研究促進事業 活動報告【A型】

共同研究促進事業【A型】(大型の共同研究や受託研究のプロジェクトリーダーとなる研究を提案する) の昨年度採択者の活動報告をシリーズでご紹介します